

【序論】本研究は、Brian らによって提唱された Relational Regulation Theory (サポート期待と精神的健康の関連を説明する理論 (2011), 以降 RRT と記す) を援用し、高校生と担任間で行われている日常会話の頻度を測定することができる「高校生版学級担任との日常会話尺度 (以降、日常会話尺度と記す)」を開発することを目的とした。

【本論】日常会話尺度の項目の原案 (項目プール) を作成するために実施した第1調査では、高校生 413 人から担任に求める会話内容として 565 のコードが得られた。これらのコードを内容的類似性に基づいて分析した結果、18 カテゴリーが生成され、これらを日常会話尺度の項目プールとした。

第2調査は、対象者 (高校生) による内容的妥当性の確認することを目的に、上記項目プールの 18 項目に対する意思の程度を 4 件法で問い、[意思がある群] と [意思がない群] の人数を、正確二項検定を用いて比較した。高校生 923 人から得られたデータを分析した結果、[意思がある群] の人数が有意に多かった項目は、10 項目であった。更に、2 名の学校保健研究者による協議により、本論における日常会話の定義である「会話そのものを楽しむことや自分の気持ちや考えを伝えるといった会話内容」に該当する「将来像」、「クラスのこと」、「部活動」、「冗談事」、「人生経験」の 5 項目を選定した。

第3調査は、上記 5 項目の 1 因子によって構成される「日常会話尺度 (試作版)」を作成し、試作版尺度の構造的妥当性と内的一貫性、および因子不変性を確認するために実施した。高校生 1,394 人から得られたデータを分析した結果、確認的因子分析の適合度は、CFI=0.993 RMSEA=0.076、項目反応理論の結果は、識別力 0.963~1.332、困難度 -1.435~1.958、 ω 信頼性係数は、0.823 であり、構造的妥当性と内的一貫性が確認された。また、多母集団同時分析における Configural Invariance レベルから Residual Invariance レベルまでの性別間の適合度は、CFI=0.989~0.991、RMSEA=0.056~0.092、学年間の適合度は、CFI=0.982~0.990、RMSEA=0.057~0.076 であり、性別間、学年間において因子不変性が確認された。

第4調査は、RRT をもとに設定した仮説モデルを用いて、試作版尺度の仮説検証による妥当性を確認するために実施した。高校生 1,688 人を分析対象として、構造方程式モデリングを用いて仮説モデルの適合性と変数間の関連性を確認した結果、モデルの適合度は、CFI=0.955 RMSEA=0.044 であった。また、担任との日常会話頻度と担任サポート期待における情緒的サポート期待および道具的サポート期待は、有意な強い正の関連を示し (0.516, 0.474)、抑うつ・不安は、有意な弱い負の関連を示していた (-0.111)。これらの結果は、仮説を支持するものであり、試作版尺度の仮説検証による妥当性が確認された。

【結論】第1調査~第4調査の結果は、担任との日常会話頻度を適切に測定できる頑健性の高い「日常会話尺度」が開発されたことを意味している。本尺度は、担任との日常会話頻度が高校生の心理行動に与える影響や、担任との日常会話頻度の学年差、学級差、個人差などの検討に活用できる。これらの検討によって得られる知見は、高校生に対する担任による実用可能性の高い学校精神保健における一次予防策の考案に繋がるものであり、健康の維持増進に寄与することを目的とする健康科学の学術的な発展に貢献できるものと思料する。